

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成14年  
5月号

毎月23日発行  
通巻381号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成14年5月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良県大倭町1の12  
(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



ラブコールするダルマガエル (文・6頁) 井手 泉 写

平成7年4月16日 第247回大倭会文化行事

## や たに います く し たま ひ こ 矢田坐久志玉比古神社

——長曾根日子を訪ねる

## 法主様のお話より

ここは、普段には矢田神社とも言いませんが、ニギハヤヒノミコトの伝承のあるところですね。

生駒の向こうの石切とか、生駒山、あの付近にはナガソネヒコとかニギハヤヒノミコトの伝承がたくさんあります。それと、この登美(鳥見)谷に移られたという伝説ですね。その場所、その場所によつてあります。しかし、何年前の話やらいつの話やら、その年代とかは全然分かってないですよ。

古代からの言い伝えというのは、その当時各地に神憑りがおりましたね、その神憑りの人に何らかの霊がかかってくる。その時、ニギハヤヒノミコトがかかってくる。狐がかかってくる。そうやなしに狐がかかってくることも狸がかかってくる。何かの固有霊がかかってくる場合もある。ここだけやなしに九州へ行ったかてどこへ行つたかて一緒や、そういう風にして伝えられたものが、各地にあるんですね。古代社会は祭政一致の時代ですから、神憑りの言うことは真実性があるように当時の人は思っていた。その神憑りが話すことを、聞いた人達が記録に残してるんですね。

だから、大倭の私の家の方の伝承でも、実際はどうなのか、私も知りません。何しろ百七十二万年前に、ニギハヤヒノミコトがああ場所で生まれていると言うんです。お父さんはスサノオノミコト、お母さんはクシイナダヒメノミコト、これも伝説です。言い伝えやからね、真実性

がないんですよ。けれども、土地土地で昔からのそういうような伝説があることは、現実にあつた何かを、その地区の人達が保存し大事に言い伝えてきていると思うんです。ずーっと言い伝えてきたというところに尊さがあるのです。

私は戦争中に何回かこの矢田神社へお参りさせてもらいましたけど、飛行機のプロペラがお供えしてあつたように思います。今は——(皆)楼門のとこ、正面にかかっています。——あつて、そう。

それは、ニギハヤヒノミコトが天の磐船いわふねに乗って空中を巡って来たという伝説があるんで、飛行機の神さんということになって、軍人さんがよくここへお参りに来ました。軍人さんがここへお参りに来たからといって、戦争に勝ったわけやないしね。結論は負けたんやから。

霊界の人格霊の中には人間に加担して武力戦争で相手をやっつけるというようなね、そんな者もいると思います。けれども、皆が栄えていくというのが天地自然の摂理なんです。だからケンカして人を殺して領地を占領するというような、そんな行為に加担する神さんは無いはずやねん。それでも戦争中は日本の神さんは日本を守ってくれるというように迷信やけれど信じておつたわけや。

しかし、高級な人格霊というものは、本当はそういうことには片寄るものどちがいます。

大体、こちらにある伝説は殆ど、神武天皇時代よりももう少し下つた、崇神天皇の頃の神憑りの言つたことなんですね、おそらく。

日本の歴史を見ても、元明天皇とか元正天皇とか、飛鳥から奈良へ移って行く頃に文字の記録として残しているおるんやね。私はこう聞いてきましたと伝えておる人の言うことを書いたり、神憑りが言つたことを書いたり、そんなものが『古事記』とか『日本書紀』なんです。

だからニギハヤヒノミコトに関してですよ、あちこちに言い伝えがあるということは、古代に何かの真実があつたんやろ、と。

この場所は登美谷の入口です。こちら側に矢田神社があつて、向こう側に登彌神社がある。ここから南の方は、斑鳩からずーっと大和の広みになつています。そして北の方に登美谷が長く、三碓みつがす、二名にみょうから、高山とか、くろんど池まで続いておるんです。大倭神宮のところが一番くくられて、そこからまた少し広うなつてますが。

山があつて長い裾根がある、その裾根をソネと言つたんです。そういう長いソネにおつた王さんということになってナガソネヒコと、名前の由来はそういう意味なんです。だから名称としては、登美よりもナガソネの方が古いんです。ナガソネ(※書紀はナガスネ)は元、邑の名なりと、『日本書紀』には書いています。登美というのは農耕時代の稲作にちなんだ名称なんです。瑞穂のことを登美草と言つたんです。だから登美という名は非常にありがたいのです。

神武天皇が大和へ出て来た時の言い伝えでは、登美谷に金の鶏が出たと言つたんですね。書いたのは奈良朝頃ですが、昔の話を後の人が書いているわけですよ。学者はいろいろ批判してますが、とにかく何かの奇跡があつたということやと思うんです。この神武天皇さんも、日本歴史ができてからは偉い天皇さんになってます。しかし実際には、これは私の主観やけども霊界なんか見ておつたら、九州から来て大和で婿養子になられて、ナガソネヒコの次の代が神武天皇なんです。それまではナガソネヒコという名称で歴代治めておられた。ナガソネヒコは、ニギハヤヒノミコトの系統なんです。その系統の中には、物部という神まつりをする氏とか、他にもいろいろあります。

とにかく、この登美谷というのは歴代のニギハヤヒノミコトの本拠地ですね。ニギハヤヒノミコトが統治していたのは、近畿一円であつたと思います。神憑りの口を通して出てくる名前というのは、何代でも同じであることがよくあります。『日本書紀』を作つた時もクシタマニギハヤヒノミコトやし、何万年前もニギハヤヒノミコトです。今、日本には一億もの人間がいて一人一人名前がついとんねけど、大昔には個人の名前なぞおそらくなかつたんやないかな。

今日はナガソネヒコのあとを訪ねて、ということになってますが、ナガソネヒコも一人とちがうんや。歴代、ナガソネヒコなんです。だから、生駒にも登美にもあちこち、その時代におつたナガソネヒコがあつてこそ良いと思うんです。

南の桜井や宇陀の方にも伝承地があります。近畿一円にそういう名称の言い伝えがあるのは当然のことやと思います。ところが人間というのは、それはワシとこのことやとか、あれはウソやとかね、すぐに言い出しよんねん(笑)。

昭和十五年の紀元二千六百年の聖蹟決定の時でも皆それやつたんです。私は私でこの代表として、桜井や宇陀を相手に理論的なケンカをしました。結果、登美谷が「金鶏発祥」で勝つて、「鳥見山中の靈時れいじ(祭りの庭)」というのが桜井の方に決められました。

その当時、内務省というのがあつて、どつちかに決めないかんわけやけど、この問題には裏に奈良県の政治家が関係してました。それが南を推しよる。北は私一人。上層部では、私の理論の方が通つていたらしい。だから金鶏発祥の方は南へ持つていくことができない、と。

その時、資料としては『日本書紀』を唯一、絶

## 登美谷の名残 第7回

### 「二名」の名称について

矢追隆義

現在の当地の集落は、鎌倉時代以降、発展したものとされる。

歴史をたどれば、鳥見ノ邑が鳥見ノ里へ、それが郷となり、鳥見ノ庄と変わる。さらに上鳥見庄・中鳥見庄・下鳥見庄と別れ、後に上鳥見庄は二名庄、中鳥見庄は三確庄、下鳥見庄は中村・大和田・石木付近（城村も含まれる）庄となる。

大化の改新により「条里制度」が制定されたわけだが、平安時代に入ると早くもこの制度がくずれ、貴族・社寺などが土地を所有することになる。これを「荘園」と呼んだ。荘園と言っても一任された管理者がおるわけではなく、権力者がその土地に対し自己の名をつけた。これらの土地を「名田」と呼び、持ち主が「名主」と呼ばれていた。

荘園には、一つの自然村落で構成されるものもあれば、二つ以上合わせたものもあったので、

対に真実と考えることになってたわけ。私は『金鶏の黎明』という本を出してね、地名と『日本書紀』を照らし合わせてクソ理屈ばかり言うて、相手の代表の学者とケンカしたんやね。そのクソ理屈が通ったということや。お上では、金鶏発祥はどうしたかて登美をさけることはできない、ということも金の鶏がどこから飛んだのやら場所は分からない、登美谷一円ということに決まったんです。そうすると今度は南がうるさい。それで、鳥

見山中の霊時は——神武天皇が即位されて四年後、皇祖天神をお参りに来られたところ。大倭での「申孝祭」（二月二十三日）の日なんです——桜井の方に、天下りで理屈なしに決定しました。まあ、そういうようなイザコザがあつてね、おもしろい時代でした。そのために政治家や県の連中がえらい文句を言うて、大倭神宮には撤去命令が来たんですよ。

私を助けてくれた小谷さんて、おもしろい人で

名田を単位とした。

「二名」の名称は、その荘園が名田二つから成り立っていたからだという説と、〇〇二名という名称の名田から成り立っていた荘園だから二名庄になったという（永島福太郎博士による）説もある。

これらとは別に、小野姓家の系図の春日皇子の条に、「二名と云訳は、此所に上小野の波利原、下小野の波利原、と名称二ヶ所有故なり」（二つの名称があるから二名と言う）という伝承があつて、土地の人には今でも語り継がれている。

### 余録として

この二つの「はりはら」の名称は、『日本書紀』の中で記述されており、「金鶏の霊時（まつりのにわ）」の位置・場所を裏付ける文献上の重要な根拠となる文言である。即ち、「其地を號けて、上小野榛原、下小野榛原と曰ふ」とある。そのため戦前、皇紀二千六百年記念のための国家的事業、「金鶏発祥霊時伝承地」決定に際し、宇陀郡榛原町と鳥見邑との間で争われた歴史がある。

ね。差しを振り回して、撤去の指図しとる県の人に、「鶏杜に鳴くや地鳥みのおわり」と、そんな句を書いて渡してたわ（笑）。

私は、言い伝えのことやから真実は分からん、数多うあつてもええやないかと言うんだけれど、当時の桜井の連中は絶対にこやと言いつけるしね。矢追のあいつがゴチャゴチャ言うて邪魔しよつたということやな。

そういうようなことで、登美谷というのは古代社会では非常に重要な場所でした。登美谷の入口のここに矢田神社、向こうに登彌神社があつて、両方の祭神がニギハヤヒなんです。それからずーっと奥へ行って大倭神宮がニギハヤヒの生まれた場所になるんです。そんなの信じなくてもいいんですよ、何億年昔の話やもの。けれども信じる人は信じたらええ。疑う人は疑つたらええ。というて、現実に大倭神宮の場合は、それがために私の一族は打たれ叩かれひどい目に合っているんです。結局、もう認めますというところまでね。

今日のことも、登美谷はどこへ行つてもニギハヤヒノミコト、あるいはナガソネヒコが関係しています。だから大倭神宮だけであつて他はウソかなあと思つてもらつたら困る。言い伝えは数あるほどええねん。ところが日本人はどこかを一つに決めたがつてね、それ以外はウソやとかニセモノやとか。もうちよつと胸襟を開いて、ものごとを広く見ていくという、そんな気持を持ってもらうといいんやけど。

今は大倭神宮に対して何ら文句を言われへん時代になつたけれど、昭和十五年頃の私は注意人物やつてんで。ニギハヤヒノミコトのことを言うのはよろしいねんけど、ナガソネヒコを顕彰しようとするの大変や。東京の警視庁から来て、私の行く先、行く先に付いて歩きよる。それくらいナガ



昔は、四月三日が神武さんの日で、村の人達は鶏の峯でお寿司などを食べる習慣があったそうです。戸外でそれにあやることはできませんでしたが、大倭会館に移動して、山菜のてんぷら等をして頂き、お弁当を楽しみました。(岸野春子)

ソネヒコは、神武天皇とケンカしたというので国賊やつてん。  
今日はこちらして文化行事として矢田坐久志玉比古神社にお参りしてますが、この地区におられる他の人格神とも、大倭から来ましたとにぎやかに交流して頂くのがあるがたいと思います。

### 大倭会第二六九回文化行事報告 鶏の峯へ——長曾根日子命シリーズ

平成十四年四月二十一日当日は、雨模様になりました。参加者は二十人。まず大倭神宮社務所で、矢追隆義さんや北川俊秋さんに、地元ならではの興味深い話を色々聞かせて頂きました(写真)。

その後、鶏の峯(大倭神宮の奥の宮のような所。鶏の峯の裾の字名は今も「時」と言うとのこと。金鶏の霊時の時です)まで移動。ところが鶏の峯の本来の頂上は、宅地造成のためもう削られてしまったとのこと！ その土でふもとの池が埋め立てられ、今は公園になっている場所に行つたわけです。池の傍にあつた役の行者像が公園の隅にお祀りしてあります。空気が澄んで、大和の広みの向こう側に三輪山や多武峯、香具山がよく眺められました。

平成13年11月11日 大倭会文化講演会 於：大倭大本宮拝殿

## アニミズムの世界——沖繩・龍神……(2)

—故山尾三省さんを偲びつつ—

講師 野本三吉氏

### 教師を辞めて山谷で働く

ぼくは大学を卒業して小学校の教師をやっていました。教師をやっている間、先生としてそれは言つてはいけない、やつてはいけない、とよく注意される。例えば寒くなると半纏を着て学校に行くんですね。靴が嫌いでゲタをはいて学校へ行っていったんです。そうすると校長室に呼ばれて、「君、学校の先生というのは子ども達の前でそういう格好をしたらダメだよ」と注意される。朝礼台に上がつて、「おはよう、ぼくね、今朝〇〇君に会つてね、おはようと声かけてくれて嬉しかったな」と言う。職員室へ戻るとまた「先生が自分のことをぼくなどと言つてはダメだ。先生はねと言いなさい」と注意されたんです。今もって、ぼくはぼくなんですけれど、どうもこれはおかしい。教師という集団の中に入ると、言つてはならないという事が出てくる。あるいは一つの村の中でも、こういうことを言おうと思うと、それはダメだよとか、変なことすると村八分にされてしまう。日本で、いったい何なのだろう。自由がないのではないか。もっと、一人一人が好きなことをやっていいはずではないか、という思いがありました。

たちにつけるのは嫌ですからね。辞めてどうしようかなと思つた時に、イスラエルにキブツという集団農場があつて、そこは皆が自由で、いろんなことを話し合いながら決めてやっている共同体だと知つて、そういうところに行きたいなと思つたんです。そして岸田哲さんと出逢ふことになるんです。

イスラエルは砂漠の国です。砂漠というのは水がない。水が大事ですよ。今、注目のアフガニスタンも水がなくて、中村哲さんたちが一生懸命井戸掘りをやつていらつしやる。水がない、緑がない、石ばかりの国です。日本とかアジアというと、水があふれるようにある。緑があつて、土があつて、そういう中で暮らせるわけですね。しかし、まったく自然に恵まれないところで、皆が助け合つて生きていくために、共同体をつくつていく。そこに行つてみたら、もっと日本の中でお互いに助け合わなくてはいけないということを感じるに違いないと思つて、キブツに行こうと思つた。しかし直前に、中東戦争が始まつてしまつた。六日戦争と当時は言いました。ぼくはその時、十六人くらいのグループの代表だつた。行くつもりで全部準備していたのですが、行かれなくなつた。

昔は、四月三日が神武さんの日で、村の人達は鶏の峯でお寿司などを食べる習慣があったそうです。戸外でそれにあやることはできませんでしたが、大倭会館に移動して、山菜のてんぷら等をして頂き、お弁当を楽しみました。(岸野春子)

最終的には通信簿をつけたくないということがあつて、教師を辞めるのですけど。1なんか子供

そして東京の山谷で約半年くらい日雇い労働をしていて、その後半のところで夢を次々と見るわけです。

## 比嘉ハツさんを尋ねて沖繩へ

それで沖繩に、比嘉ハツさんという方を尋ねていくことになる。比嘉ハツさんとご主人の良弘さんがやっている比嘉鉄工所を尋ねていくわけです。

そしたら、良弘さんが「うちの奥さんが日本から若い男の人が来ると言ってた。しかも、日本に大地震が起きるといことが、巫女さんたちみんな出てきてね。それをおさめるために、今、巫女さんたちと宮古島に行っているんです。もしその人が来たら、そこに行きますかと聞いてくれ。行くと言ったら私の夢に見ていた人だからって」と言われたんです。もちろん、ぼくは行きたいと言いました。次の朝一番で行きましょうということになりました。

比嘉さんのところは、今は沖繩市ですが、昔はコザと言いました。すぐそばに嘉手納基地がありまして、機関銃を持ったアメリカ兵がいっぱいいる。戦後20年経っていました。まだアメリカの支配下で日本から行く時はパスポートを取って行かなければならなかった。ドルが使われていたし、街並みは英語の看板だらけでした。

夕食が終わった後、良弘さんはハツさんのことについてよくいろいろ話してくれました。お二人とも沖繩の出身なんです。第二次大戦の時、広島に住んでおられたそうです。ハツさんは広島に原爆が落ちる二日前から、神がかりが起こってしまっただけです。

これも『いのちの群れ』に記録してあるので、そのまま読みます。

私も家内も生まれは沖繩なんですがね、若い頃、本土に出まして働いていました。戦前は大阪、それから戦争がはじまるころには広島にいました、三菱重工の下請工場の経営をしりました。

広島にいました時に、例の原爆が落とされるわけですがね、この一日前です。家内が、その広島島の街がとけてなくなってしまう夢を見たからと言いつけてね、子ども達は親戚のところへ避難させると言っていました。

前の晩に連れて行ったりですね、あるいは又、みんなとけてしまうから大事なものは地面の底に埋めろとか騒ぎだしまして、大変だったんですよ。しばらく前から家内は一種の神がかり状態になっていましてね、妙なことを口走ることはあったんですがね、その時はひどいものでした。今でもよく覚えていますがね、私にも従業員にも命令口調で言いつけましたよ。

その夜は、家内は白衣を着ましてね、一晩中祈ってましたよ。誰もまさかと思っていたんですがね。翌日は、本当に原爆が落ちて、広島はメチャメチャになりました。もうあの時は、何が何やらわかりませんでした。あちこちで火災が起きまして、みんな火傷をしましてね。それはひどいものでした。ところが、これも不思議なんですが、私も家内も、それに五十人程もいた従業員も、誰一人として死者が出なかったんですよ。

これは本当に不思議なことですがね。

あのあと、みんな集まってどうしようどうしようといってましたらね、家内が、土に埋めたものから、米とか味噌とかを掘り出して、とにかく山の中へ行け、というのでゾロゾロついていった訳ですよ。あの時は、みんな喉がかわいていましたね、どんな水だろうと飲んでたんですが、家内は絶対飲んではいかんといましてね、飲む者が

いるとたたいやめさせてとにかく山まで行きましたよ。

途中で雨が降り出しましてね。黒い雨でした。みんな雨がつめたくていい気持なんで体にあびたり飲んだりしてましたが、これも家内が軒下にかくれろと言うもんで、従業員もみなかくれた訳ですがね。まあ、あの時、雨にあたっていたら、今頃はもうなっていたかわかりませんなあ。

(続く)

## 私の暮らして生きる

### 法主さまのことば

和歌山県有田市 狗巻 希以子

「必要なものは時がくれば与えられる。それまでは必要ないもの」。法主様のこのことばを大事にして、何かの時に思い出しています。

平成13年は、このことばを実感した年でもありました。主人は4月から千田地区の会計の大役を仰せ付かり忙しくしておりました。5月に入ると前々から裏の離れの改築を大工さんをお願いしていたのですが、工事にかかれるとのことで大工さんにもう一度見てもらったところ、「この家に手を加えるのはもったいない。新築にしたらどうか」という話になり、私達は思ってもいなかった上棟を経験させてもらいました。区の出かけることが多かったのですが、大工さんとの打ち合わせ日は不思議な位、用のない日ばかりでした。

8月には無事完成し、母に入居してもらいました。11月14日には娘が出産し、初孫を抱くことができました。今では4ヶ月になり、子供とは違ったかわいさで会うのが楽しみです。

息子に早くかわいいお嫁さんを、と思う今頃ですが、法主様のことばを信じ、その時を楽しみに待っていたと思います。(3/23)

## 滅び行くダルマガエル

井手 泉

田植えの終わった明るい水田で、ダルマガエルのオスは左右の鳴囊を丸く膨らませ「ンゲゲゲゲゲ・ンゲゲゲゲ」と小刻みに早く振らせ長く引張って鳴く。遠方で聞くと山羊が鳴いている様にも聞こえ、他の蛙の声とは容易に区別することが出来る。これはもちろんメスを呼ぶラブコールであるが、オス同士のナワバリ宣言でもある。直径1メートル余りの領域をそれぞれのオスが防衛し、他のオスが接近して来ると激しく鳴いて威嚇し、さらに近付くと鳴り物入りの取っ組み合いになる。いわゆる蛙合戦である。実に愉快な田園風物のひとつである。

しかし、このダルマガエルは急速に絶滅に向かつており、私の居住している奈良県内においても、20年ほど前には棲んでいたいくつかの地域で既に絶滅した。現在県内では僅かに3ヶ所、奈良市内ではただ1ヶ所でしか生息が確認されていない。ちなみに、市内唯一の産地は蛙の保全のため公表できないのは残念であるが、大倭に縁ある川端一弘氏と一緒に一九九七年に行なった夜間の調査で新たに見付かった生息地である。しかしその生息範囲は狭く個体数も極めて少ない。おそらく地域個体群を維持できるぎりぎりの状況の様に思われる。県内や周辺の他の産地もそんなに豊かに安定した地域はなく、例外なく生息環境は年々急速に悪化して局所的になり、個体数も目に見えて確実に激減しつつある。

ダルマガエルの分布する瀬戸内、近畿、東海における事情も皆同様であるらしい。このように急

激に絶滅の危険が増大しているとして、環境庁（省）が二〇〇〇年に発表した「改訂日本の絶滅の恐れのある野生動物」では「絶滅危惧Ⅱ類」にこの蛙は指定されている。日本本土の蛙でレッドリストに指定されたのは本種だけである。

## このままでは絶滅してしまふ

にも関わらず、国も地元自治体も何一つとしてこの蛙のための具体的対策を講じた事がない。環境省は生物多様性の保護を目的に、レッドデータリストのカテゴリーや位置づけの見直しをしただけで、現実が開発が行なわれるに当たって、その地域にこの蛙が生息しているかどうかも分からない状況を放置しており、開発事業を行なう主体に対して実効性のある規制や指導を全く行なっていない。県や市町村は本種の産地である事を全く知らずにそこを埋め立ててしまひ、取り返しのつかぬ状態にしてしまった例もある。

一方、それを知っていても、相も変わらず開発優先の大前提に立ってしか考えようとはしない。それを国も放置しているのが実情である。けれども、それでは憤りを通り越して呆れるしかない。ただ言えることは、このままではダルマガエルもトキの二の舞をしながら滅びてしまうこと、絶滅してからは遅いこと、である。

## トノサマガエルそっくりだが……

ダルマガエルは、一般に知られているトノサマガエルと近縁の蛙で外観もそっくり、比較的近年まで両種が混同されていたほどである。が、良く見れば、前者は後者よりも足が短くずんぐりした体形で平均的に小形なので区別がつく。また背面の黒褐色の斑紋が、前者では大きな紋が少数独立して散在しているのに対し、後者では小さな紋が

多数つながり合っていることから判る。

生態的にも異なり、前者は繁殖期間が長く2回産卵するのに対し、後者は4〜5月に集中して1回だけ産卵し、すぐに上陸して幼体以外は水から少し離れた草むらなどで生活し、かなり移動もする。一方、前者は産卵後も水辺のすぐ側を離れない。両者は鳴き声も全く異なっている。そのような違いによつて両者は互いに種の独立を保って共存して来れたのである。

しかしそれは昔の事である。今では湿地という湿地は埋め立てられ、雑木林は伐り拓かれ、そのうえ水路という水路は三面張りに変えられ、湿地は乾田化され、除草剤その他の農薬で汚染されている。こうした諸々の複合要因と田ん圃への水引きや田ん圃からの水落としの時期とが相俟って、水辺を離れては成り立たないダルマガエルの生活様式に大打撃を与えているのが実態である。こうして本来の本種の生息環境が減少して行く中で、トノサマガエルとの交雑も生じており、この点からもダルマガエルの絶滅が余計に加速されているように思われる。

## 根本原因は我々の貪欲にある

さて、この不景気な時代に蛙の話などノンキな事を……と思う人も多いと思うが、こんな時にこそ冷静に、蛙のことや自らのことをじっくりと観察してみることも大事であろう。「自然に優しい」という傲慢で軽薄な言葉が使われるようになって久しいが、依然として豊かさや便利さと快適さの追求を止めない我々の生活が、如何にとんでもない自然破壊と、自らの感受性や倫理性の破壊をもたらしているかを直視し、少しは頭を冷やして、蛙など人間以外の生きものにも配慮して慎ましく生きるべきではないだろうか。（合掌）

# 寸 莎

## 第51回

### 渡 邊 詩 美 さん

#### 疎外感と向きあう

今回の「寸莎」では、久しぶりに大倭へやってきたばかりの若い人に登場してもらおう。今春に大学を卒業して大倭安宿苑に就職し、身体障害者療護施設の菅原園の寮母として仕事を始めたばかりの渡邊詩美さんである。

何故、渡邊さんに今回登場してもらったかという、彼女には大倭や交流の家との浅からぬ因縁があると耳にしたからである。というのは、彼女の母親がFIWC関西委員会のかつてのメンバーで、交流の家に入ったり、若い頃にハンセン病の療養所で一年間、看護婦として働いたことがあり、詩美さんも小学生の時に交流の家での囲碁大会の際などに来邑したことがあるというのである。

彼女の母親には各地のハンセン病



の療養所に友人も多く、「詩美という名も、大島青松園に住んでいる詩人の塔和子さんが『詩の心がわかるように』との願いを込めて母と一緒に考えてくれた」のだという。

子供の頃から瀬戸内海にある大島青松園や熊本の菊池恵楓園などの療養所に母親と一緒に尋ねていったので、「ハンセン病の後遺症にシヨックを受けたりすることは全くなくて、知り合いの方のごく普通のおつき合いという感じだった」という。ところが、中学生になってハンセン病関係の本を読むようになって、「はじめて、このことが深刻な『社会問題』であることを自覚した」と話してくれた。ちなみに、京都精華大学での卒論のテーマも、「『らい』を生きた詩人・塔和子——ハンセン病療養所の中で生まれてくるもの」という彼女の名付け親に関するものだった。

話しを少し前にもどすと、詩美さんは両親が移り住んだ滋賀県の郡部の村で、五歳下の弟と共に育った。「ヨソ者だったし、内気で運動も苦手、小学校でも、どちらかというところ、いじめられっ子」だったというから、療養所の人たちの心と共振できる精神の繊細さが、その体験の中で育ったのかも知れない。

小さい頃からエレクトーンを習っていた素地があったので、中学の吹奏楽部ではフルートを吹き、進学した天理高校のブラスバンドでもコントラバスを弾いた。大学でもジャズ研究会に入ってベースを弾いていたというから、根っからの音楽好きで「音楽が人生の友」であるようだ。

奈良の天理高校に入学したのは、全国的に知られた吹奏楽部に入りたというのも一つの動機だったが、「小学校の時に、毎年『おぢばがえり』で天理を訪れた際に、そこではいじめられずに楽しかったという体験を思い出して天理高を選んだ」という彼女なりに切実な動機もあったようだ。

大学は「校風が面白そうな」京都精華大学に進学した。天理で「信仰や教義に守られすぎて自分の意志を持たなかった」経験からすると、「急に自由なところへ飛び込んでしまった」という戸惑いさえ覚えたが、

個性的な友人たちに恵まれて楽しい学生生活を送れたようだ。

さて、福祉の仕事を選んだ理由であるが、「体の不自由なハンセン病の療養所の人のがえを手伝おうとしたが、うまく介助できなかった」という体験や、「療養型病院で看護補助のアルバイトをして介護職の魅力を感じた」ことなどが重なっての結果のようである。

詩美さんが笑いながら言うには、「交流の家と同じ敷地内の福祉施設で働いていることで、ハンセン病の療養所で出会った人たちが、私のことを、よりしっかりと覚えていくれるのではないか、という『不純な』動機でここを選んだのかも知れない」。

同時に、「ハンセン病や交流の家について調べていくうちに、人づてに聞いた矢追日聖師の人柄の暖かさに魅かれて」という気持ちも確かなようである。「そういう人が創始者である村では、誰かが疎外されるようなことはないだろう」という詩美さんの思いを聞くと、彼女の子供時代の疎外感の深さを想像してしま

う。自身の性格について尋ねると、少し考えてから、「団体行動が苦手」だという。血液型はO型で、好きな色は茶色。(聞き手 岸田哲)

# あじさい日誌

## 大倭会第271回文化行事

### 飛鳥の万葉文化館へ

開催中の「涼・夏色の景」を観賞し、初夏の一日を過ごす。

日時 平成14年6月16日(日)  
13:00集合

集合場所 万葉文化館玄関

交通 近鉄橿原神宮駅東口・バス2番乗り場で12時41分岡寺行きに乗り万葉文化館西口で下車(12時53分着)。

または近鉄桜井駅南口・2番乗り場で循環バス11時55分に乗り万葉文化館で下車(12時14分下車)。

(注意) いずれもバスは1時間に1本。

ルート 万葉文化館……飛鳥寺

※雨天決行・昼食は済ませてご集合下さい。

4月13日 午前11時から奈良パークホテルで邑交会が開かれ、須加宮寮長の生駒善則さんが新メンバーとなりました。  
4月14日 祝会。平成5年2月某日瑞光院の郵便受けに投げ込まれてあったという、大倭教を批判するメモ書きをテーマにして、小さな紙片1枚でも心をもつて受け取られていた法主様の生き方に改めて触れました。  
4月15日 大倭神宮に於いて、<sup>須加宮寮</sup>箭祭が行われました。  
4月23日 大倭大本宮月次祭。  
5月1日 ホツマツタエを研究されている福岡市の藤田幸久さんが来邑されました。  
5月3～4日 交流の家の前にある小屋の改築のためF I W Cがワークキャンプをしました。  
5月3～5日 八王子市の荻島



千明さんと邑の杉本一家が、栃木県佐野市の唐沢山神社と宇都宮市の本丸公園、栃木リハビリテーションセンターを訪ねました。今回は藤原秀郷公とその一族郎党への慰霊のためでした。(P)  
5月2～7日 昇ちゃん、大分県耶馬溪で農業をしている鈴木健久・三浦豊子一家(共に元邑人・長曽根寮職員)のところへF I W Cが行った春のワークキャンプ(田植え準備等)に連れて行ってもらいました。

## 昇ちゃんに引かれて耶馬溪へ

一昨年の昇ちゃんとの青森旅行の後、次は佐渡、次は耶馬溪、そこまでは続けたいと私が言うのと、故鈴木かあさんは「耶馬溪ええな、うちも行きたい」と景気をつけてくれた。しかし旅行の前後の扱いが難しい。旅行中は実に大人しいし愛嬌たっぷりなのだが。

ゴールデンウィークを前に例の如く気を揉む昇ちゃんを見るとうるさくもありかわいそうにもなる。今村忠生さんが往復については引き受けてくれて、私は別行動で耶馬溪で顔を合わすという作戦にした。大成功！  
お陰で私も豊かな時間を過ごせし、帰りがけに博多駅の近くの杉山龍丸さんのお墓にお参りもできた。

しかし奈良に戻って二日間、昇ちゃんは荒れた。隣のゴルフ場の売店のドアをけとばす。菅原園で作ってもらった屋敷の食器を返しに行つて投げ割ってしまった。なんでやねん。楽しかった旅と日常の暮らしの落差を埋めてるんかなあと解釈してみるが、一生騒ぐつもりか？もう知らんで、ほんまに。

5月6日 大倭神宮月次祭。八王子市の春日作太郎さんが参加されました。  
(岸野春子)  
夜、大倭会館で邑倭の会。

5月10～11日 ボランティアグループ「あじさいの箱」がチャリティサークルの作品展とバザーを、大倭会館で行いました。  
大倭安宿苑では

4月24日 15名の新任職員の研究会で、講義や紫陽花邑の各事業所の見学がありました。  
5月10日 雨模様でしたが来賓の皆様を迎え法人成立46周年記念式典を行いました。今年は各施設でもパーティ形式の昼食でお祝い気分を盛り上げました。

4月14日 恒例の春まつりに先立ち、家族会総会と、奈良県から施設建て替えに向け家族への説明会がありました。  
春まつりの最後には全員で青空へ風船を飛ばしました。

4月20～27日 フラワーアドバイザーに来て頂き、あすか広場の花壇の土作りと植え付けを行いました。どんな花が咲くか、とても楽しみでした。  
(長曽根寮)

4月11日 奈良一〇〇年会館で行われた「歌って元気いきいきコンサート」に山口幸子さんが参加、子ども

頃の思い出の曲や青春時代の曲を大きな声で歌っておられました。  
(八重垣園)

4月15日 ハーモニカ奏者の西本昭夫さんをお迎えして演奏を楽しんだ後、コーヒータイムで談笑しました。

## あんない

\*月次祭(大倭神宮)  
6月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第四〇三回祝会  
6月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\*月次祭(大倭神宮)  
6月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大本宮)  
6月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

## たんぼ通信

### 田植えのご案内

米作り5年目となりました。今年はや又西安堵の喜多さん(二代目)に育苗していただけたことになり、田植えも以前のかたちにもどります。ふるって御参加下さい。

6月9日(日) 午前9:00～(雨天決行)

※泥で汚れてもいい服装で。  
(着替え、タオルは各自で準備)  
軍手・軍足は用意します。  
※昼食・飲み物は用意します。(持込み歓迎)

連絡先

TEL 0742-41-4615 (双葉館)